



# 我傍に立つ

ware katawara ni tatu

実名版【1】

吉野圭 著

～諸葛孔明自伝風～

遥かに遠い記憶。傍に居た人々。永遠の誓いを捧げた日々を、  
ここに――  
かつて架空史として書いた小説を実在人物名で書き直しました。

【1】収録

序 青い河

第一章 里の生活一



# 目次

序 青い河	3
第一章 里の生活	
一	13
注釈	21



## 序 青い河



東の果てに光が生まれ、新しい日が始まる。  
黒から青に移りゆく空は、ひと時、世界を青く染める。水の底の廃墟のように、全ては透明の青に浸される。  
やがて、山の先端がきらりと輝く。夜が朝に生まれ変わるのだ。そして黄金の光が、静かな大地を照らし始める。

さくっ。  
踏み出した足が地に沈んだ。  
一足ごとに小気味良い音を立て、氷の柱が潰れていく。  
立ち止まって背後を眺める。転々と丸い足跡がついてきている。視線を上げて遠く眺めた。氷の欠片を含んだ大地は、新しい日の光を浴びて煌<sup>きらめ</sup>いていた。  
夜の間、黒い影に過ぎなかった山々は朝陽に素顔を晒している。尾根に雪の刺繡をまとい聳<sup>そび</sup>える姿は、恐ろしくも美しい。  
「リョウ！」  
呼ばれて振り返った。  
彼がこちらを見ている。小走りで追いつき、襟を整えて背を伸ばし前を向いて歩いた。指で引いた時、着物の襟がまた破れる音を聴いた。家を出る時には立派だった着物も、今は薄汚れたぼろ布に過ぎない。寒さをしのぐためむやみに着重ねたぼろ布の山が、私たちの足を重くしていた。  
微かに足を引かず私を、彼が無言で眺めていた。彼の痩せた背の上で弟はまだ眠っている。  
「亮<sup>りょう</sup>は強いな」  
ふいに彼が言った。  
「一言も、足が痛いとか、母に会いたいと言わん。亮は強い子だな」  
私は答えず、足元へ視線を落とした。  
弟は旅の間中、素直に苦痛を訴えていた。歩けば足が痛いと言いつつ、夜になれば母が恋しいと言ってすすり泣いた。でも私はこの旅で一度も苦しみを言葉にしたことはなかった。  
「亮はもっと我がままになっていいんだぞ。これからは、したいことを何でも言うようにしなさい。私が全てを聞いてやる。決して遠慮してはいけない」  
かけられた声の意外な優しさに、はっとして隣の人を見上げた。  
陽に焼けた顔の中から慈しむ目が私を見つめていた。

「これからは私がお前の父になるのだから」

その年、十三歳（数え）の私は弟の均<sup>きん</sup>とともに、これから父となる人に連れられて旅をしていた。

本当の父が死に、私たち兄弟は伯父に引き取られることになったのだ。ちょうどその頃伯父が遠方<sup>なんしやう</sup>の南昌へ越すことになったので、私たちもついて行かなければならなかった。

故郷を離れた日のことは、ぼんやり覚えている。

陽を浴びて白々と光る道の果てに母が立っていた。大きな家の門の前でたくさんの侍女に身体を支えられるようにして、彼女は呆然とこちらを眺めていた。たぶん今生の別れとなるだろう場面なのに、私には泣いた記憶がない。均の泣き叫ぶ金切り声だけが記憶の底に響いている。

その後、どうなったのか覚えていない。

旅の記憶の一部を私は失ってしまった。

どうして馬もなく従者もなく、三人だけで旅をしているのか。どうして、着の身着のままなのか。

わざと遠回りの道を選び、何ヶ月も歩き続けてきたと感じる。山を越える時でさえ自分たちの足だけを頼りにした。

危険が身に迫っているという感覚はなかった。

けれど空白となった記憶の中に、何事か恐ろしい出来事があったことは確かだ。

それはきっと思い出してはいけない、思い出すことは危険な出来事なのだと思う。

地平線が光った。

横一列に宝石を散りばめたように、きらきらと一筋の光が輝いている。

はじめ何が光っているのか分からなかった。しかし歩いて行くと、光の正体が水であることが分かった。地平線で輝きながら揺れている水。やがてそれは視界一杯に広がる青の絨毯になった。

「海……」

思わず呟いた私の声を耳にして、伯父が訂正した。

「いや、海ではない。あれは河だ」

「河？」

息を飲む。まさかそんなはずはない。だって対岸が見えない。

「そう。河だ。天下を潤す大いなる水流、我ら祖先の命を養ってきた大河だよ」

あれが、話に聞く江<sup>こう</sup>（長江）。

その大きさは想像を遥かに越えていた。向こう岸が見えないほど江は大きく、私たち人間は小さいのか。

私は漢<sup>かん</sup>という大国に生まれた。我ら漢人の能力は絶大で、漢人が作った文化は決して崩れることがないのだと教えられた。ところが今、各地で乱が起き、“偉大なる”漢の国家は傾いている。盗賊は好き放題にうろつき回り、女と子供はさらわれ、男は殺されている。この十年間、人々が流す血と涙は絶えることがない。

けれど江はそれら人々の悲しみさえ呑み込んで、今日も青い水を湛えている。この河はそうして長い歴史を、青いまま流れてきたのだ……

「海！ 海だ！」

いつの間に目を覚ましたのだろう。

歓声を上げた均が、伯父の背中を飛び降りて駆け出した。

河だ、と訂正する暇もなかった。私も少し笑ってから、弟の真似をして河岸へ駆けて行った。

その夜は河原で野宿をし、夜明けとともに渡し舟を探して河沿いを歩いた。戦乱の最中であるため貴族用の豪華な船は見当たらなかったが、漁師が使うような貧弱な船ならすぐに見つかった。貴族だと悟られたら断られる。伯父は身分を隠して渡し守に交渉した。幸い供も連れず襤褸ぼろを着ている私たちの姿を見て、貧しい農民の親子であると信じてくれたようだった。

今にも沈みそうな船におぼつかない足取りで乗り込む。始めは怖かったが、陽光に輝く河面を船が滑り出すと水の青さに心を奪われた。均は初めて体験する航行に楽しげな声を上げた。

やがて船は対岸に着き、しばらく歩いているうち賑やかな街へ辿り着いた。目的地に近いのだった。先を歩いていた伯父が振り返り私たち二人へ笑顔で言った。

「今夜はここで宿を探し泊まる。身を清め、明日から身分を偽らず馬車に乗るつもりだ。だから今日だけは自由に庶民として店々を眺めて良いぞ」

広い道の両側に多くの品物を積み上げた店が並んでいた。食料があり、着物がある。さらに大勢の人々が店を覗きながら歩いていた。人々の顔には暗い陰がなく、健康そうに輝いていた。踏みにじられ荒廃した私たちの故郷、徐州じょしゅうとは別世界だった。

「ここには戦乱の陰はないのですね」

私が伯父を見上げて呟くと彼は頷いた。

「そうだな……今のところは、だな。ここから先の地にはまだ奴の力が及んでいないから」

“奴”と、隠せない憎しみを籠めて言った伯父の言葉で不快な誰かを思い出した。けれどそれが誰なのか、何故不快なのか思い出せなかった。思い出そうとすると吐き気がする。私は自分の記憶を探ることをやめて横の店へ視線を移した。

食い入るように見てしまったのは書店だった。学問をしているらしい簡素な身なりの若い男たちが書店の前で立ったまま書物を読んでいた。書物は高価なため蔵書を持つことができるのは名家の貴族くらいだ。一般の書生は書物を買わずに店へ通って読む習慣があるらしい。店の書棚に並んでいるのは多くが古い竹簡や木簡だが、店先には新しい素材である紙の書物もあり、めずらしさに私は思わず立ち止まって眺めた。そんな私の姿を見て伯父は声を立てて笑った。

「亮は幼い頃から、本当に書物が好きだな。勤勉な子だ。よし、特別に一冊買ってやろう。何でも好きな書物を選びなさい。紙の書物はどうだ？」

叔父が言ったので私は仰天した。

「とんでもない。高価過ぎます。このような大変な時に買っていただくなんて、申し訳

ない」

大人じみた私の恐縮に伯父は苦笑いしながら寂しそうな顔をした。「相変わらず年寄りのような子供だな、お前は。遠慮するなど言っただろう。それに、次はいつ買ってあげられるか分からないのだぞ。私もいつまで生きられるか分からないのだから」

伯父の暗い口ぶりに言葉を失った。その通りだ、と納得しなければならない今の時代が悲しかった。誰もが一瞬先には死んでいてもおかしくない、特に伯父・玄<sup>げん</sup>のような役人は。だから養父となる人の厚意を無駄にしてはならないと思った。甘えられるうちに甘えておかなければならない。

私は素直に書店へ近付き、購入する書物を選ぶため店の中へ入ろうとした。その時ふと店の横に立てられた看板の、風に揺れる布のようなものに惹きつけられた。近付いて見る。看板に括りつけられた掛け物は黄ばんだ羊の皮で、劣化して薄くなりかけてはいるが、墨で何かの図形が描かれているのが見て取れた。小さな丸を繋ぐ細い線が図形を幾つも描いている。天蓋に散らばる星々の並びに似ていた。

「これは……星図？」

感じたことを呟いた。しかし学んで知っている星図とは形が違うようだ。北斗がどの丸なのか分からず、宿の形も見分けられない。けれど見慣れないはずの図形は奇妙に私の胸を騒がせた。

「めずらしい形だろう。これは遠い西国の星図だよ。お客さん、星読みに興味があるかね？」

不意に声をかけられたので私はぎょっとして、声の主を探し辺りを見回した。視線より下、書店の横に据えられた小机の後ろに頭巾を被った人が座っていた。声はしわがれていたが女のような見た目。掛け物を売りつけられるのだな、と気付いて私は警戒した。

「はい。星読みは好きですが……、異国の星図では読むことができません」

断りながらも、星図から目を離すことができなかった。学んだことはないのにそれらの図形を知っている感覚があった。星図の前から足を動かさずにいる私を見て女はくぐもった声で笑った。

「少年、占いが好きか。では星読みではないが、占ってあげよう。顔をお見せ」

断るより前に腕をつかまれて引き寄せられた。頭巾の下から女の瞳が覗く。目の前に来たその瞳を見て背筋に冷たいものが走った。

<sup>へきがん</sup>碧眼。西域の民か。

女の瞳は濃く美しい緑だった。森の奥深くにある湖に似た緑に捕らえられ、私は身動きができなくなった。さらに顔を近づけながら女が囁く。

「お前たち東の民は顔の形で人物を占おうとする。しかし顔の形などに人格は表れないのだ。こうして瞳の奥を覗き込まなければ、魂まで読むことはできない。瞳を覗き込めばその者の魂が読めるぞ。魂の歴史から、その者の本質全てを……」

私の瞳を見つめていた女の顔が不意に引き<sup>ひ</sup>寄せられた。

「お前！ どうしてここへ生まれた！」

大声で女が叫んだので道を歩いていた人たちが足を止め振り返った。伯父が駆け寄って来る足音が聞こえた。私は突然の罵声に肝をつぶし女の瞳から目を逸らすことができ

なかった。女は憎しみで顔を歪めて私を睨み罵倒し続けた。

「この地へ生まれて来るな！ お前たち二匹の龍の争いに皆が巻き込まれることになる」

「おい、何をしている」

伯父が来て私の腕をつかんでいる女の手を振り払った。怒りに震えた伯父が女へ言葉を吐き捨てた。

「子供に何てことを。脅して何か売りつける気だな。卑しい物売りめ」

「待て。それは禍い<sup>わざわ</sup>を連れて来る子供だ。その子供を狙って悪魔が襲い来る。今すぐ殺さねばならない」

まだ女はわめいていた。道行く人々が不審げに女と私を交互に見て行く。行こう、と私の肩に手を置いて伯父が囁いたが、私の足は凍り付いたように動かなかった。

失ったはずの記憶が蘇ったからだ。

大河の瀑布のごとく記憶が体へ流れ込んでくる――

夢か現か。長い歴史の記憶が目の前を過ぎ消えていった。そして最後、霧の向こうに残ったのは荒涼とした光景だった。

いつの記憶なのだろう。一万年前よりも遠く感じるが、ごく近い時であると思う。あの荒んだ暗い景色は、ああ……、そうだ。思い出した。この旅の始めに見た故郷の景色だ。

分厚い雲の垂れこめた空の下、黒い大地一面に転がるのは無数の骸<sup>むくろ</sup>だった。見渡す限り人の胴と、胴から切り離された手や足や頭がぼらぼらに転がっていた。腹から引き出された臓腑は散らばり烏や犬の群れの餌食となっていた。

足元はぬるりと滑った。黒々と地を染め、ぬかるみを作っていたのは夥しい<sup>おびただ</sup>人の血だった。生臭い風が頬を撫でた。

あの日、私は遺骸が転がる大地を歩いていて。目も覆わず逸らさずに淡々とその光景を眺め歩いた。均は伯父に目を覆われ抱きかかえられ、「臭い、臭い」と泣きながら伯父にしがみついていた。伯父も死臭に顔をしかめながら足早に通り過ぎようとしていた。その二人の後を、私だけは冷めた顔で歩いていたのだった。

「亮」

遙かに遅れて歩く私を伯父は振り返って呼んだ。

「見てはならない。目の毒だ。早く、前を向いて歩きなさい」

そう言う伯父を私は不思議な気持ちで見返した。何が、“目の毒”なのだろう？ つい最近まで生きていた同じ人間の骸ではないか。汚らわしい物を見るように目を覆うのは違うと思った。目を覆ってはならない。見つめなければならない。彼らの生きていた証としての骸を。

それに私にはこの光景は懐かしい。何故だか分からないが、本来の自分の場所へ戻った気がした。見渡す限り屍の転がる大地は、自分の帰るべき場所なのだと感じていた。私はずっと前からこの場所へ立たなければならないと思っていた気がする。死者を慰めるために。

「平気、なのか？」

追いついた私へ思わず訊ねた伯父は、近くで私の顔を見てそれ以上何も言わなかった。決して平気ではないと伝わったのだろう。私は蒼白な顔をしていたのかもしれない。平気どころか衝撃は正常な心を保つ限界を超えていた。屍から湧き上がる悲しみが濃厚な霧となり私を包むようで、全身は重く一歩進むことも辛く感じていた。このままこの光景を見つめていたら心を壊してしまうかもしれない。それでも見なければならぬと思って見続けたから、自分で記憶を封印していたのだった。

「禍をもたらす子供よ！ 死ね！」

わめく占い師の声が耳に入り私の意識は現在に戻った。気狂いしたような異民族の女は道行く人の注目を浴びて、周りに人だかりができて始めていた。

私は小さく笑った。女の言う通りだと思った。故郷を襲った虐殺は、曹操が私的な怨みで徐州を襲い住人全てを抹殺しようとしたものだった。虐殺を指示した張本人は激情にかられてやっただけだし、無名な子供である私のことなどが彼の意識に昇るはずもなかった。しかし後から振り返れば、あの出来事の裏には私を殺す運命が潜んでいたようにも思う。

何故なら私は虐殺者に対抗する宿命を持っていたからだ。曹操のように殺戮を愉しむ者や、そんな虐殺者を崇拜する同類たちにとって私の存在は邪魔であることだろう。

「何が可笑しい」

笑みを浮かべる私に気付いて女の表情が強張った。泣きたくても笑うことしかできなかった当時の私は、笑顔のまま女へ答えた。

「あなたの言うことが正しいからです。あなたは千里眼だ」

子供のくせに大人びた口ぶりで喋る私が気味悪くなったのか。瞳に初めて怯えが走り彼女は口をつぐんだ。私は彼女の瞳を見据えて続けた。魂へ呼びかけるつもりだった。

「でもあなたは根本を読み誤っている。この時代の禍は僕一人が連れて来たものではない、今この地で生きている全員が背負う運命が惹き起こした禍だ」

自分でも思いがけず強い感情が込み上げ、少し声が大きくなった。

「無責任にならないでください。同時代の誰か一人に責任をなすりつけ、自分の担うべき運命を放棄するような汚い真似はしないでください。そんなことをして逃げ回っていたらあなた方は、永遠に運命の輪を終わらせることができなくなる」

女は私の言葉を理解したのかしなかったのか。先ほどの凶暴さは鎮まり、弱い老婆のように怯えた表情で私を見つめるだけだった。

女が大人しくなった隙に伯父は私の肩をつかみその場から離れさせた。見物人たちは頭のおかしい異民族の女が漢人の子供を虐めているのだと思っていたようで、保護者が子供を連れて行き落ち着いたことに安堵した。そして首を振りながら、「最近は何物騒だね」「女でも何をするか分からない」と口々に嘆き合い、離れて行った。

この人生を振り返る私には分かることがある。

運命とは複雑なもので、同時代に生きている者たち全員の運命が重なり合い、絡み合っ

て結果が出る。

たとえ誰かが時代を先導したように見えても、本当はその一人が決定して導いたわけではない。巻き添えになるだけで無駄に死んでいく命も、一つもない。全てが運命の輪の一部として起こる。それが世界の厳しい真実であり、誰も逃れることのできない法則だった。

複雑に絡み合う運命の交錯の中で、自分の生きる時代と土地だけが自分にとっての運命の場。私は私の運命により、故郷が虐殺に遭い殺されかけた。しかしその出来事は私一人が連れて来た禍なのではない。他の人たちも私の巻き添えとなったわけではない。ある悲劇はたくさんの運命が交わって起こる。私の身近に起きたことは、私だけの視点から見た運命の輪の一部分に過ぎないのだ。

こうして虐殺を免れ生き延びたことは私の新たな運命となった。選択肢として分岐した運命の道の一つだ。

私はその時、不思議な熱を帯びていく手を開き天にかざした。指の隙間から薄い日の光が筋となって差し込んだ。光の先に未来を見ようとした。この先の人生はどうなるのか。しかし未来は白い闇の中に泡沫として浮かぶだけで、真実らしいものは何も見えなかった。まだ本当の未来など決まっていないからだろう。

冷たい滴が手の平に落ちた。手を下ろして空を見ると、灰色の雲から雨滴が円状に落ちて来て顔に当たった。

「雨が降ってきたな。早く宿を探さねば」

眩いた伯父の足が速くなった。伯父はすぐ後ろを歩いている私を振り返り、「今日は書物が買えず残念だったな。明日の朝、晴れたらまた書店へ寄ろう」と言った。

天を仰いで私は思った。この地上が本当に晴れることなどあるのだろうか。ここは、永遠に雨が降る場所に思える。

けれど時折、雲間から光が差す。

私たちはあの光を追い求め、見失わずに生きていかなければならない。

いつか地上は真実の光で満ち、暗愚の雲は追い払われるだろう。それまで人々は幾つもの運命の輪を織り成し、地上の悲しみを生きていくのだ。

私も生きていこうと思った。私自身の輪を閉じるため。そして雲に穿つ<sup>あな</sup>孔の一つとなり、せめて一筋の光を地上へ導くために。



## 第一章 里の生活



「少爺、少爺——ぼっちゃん！」

毎朝出会う元気な声が、小気味良く畑に響いた。

「今朝はずいぶんと早いだねえ、亮少爺<sup>りょうぼっちゃん</sup>」

「ええ。たまたま、早起きしたものですから」

滅多に早起きをしない私は苦笑いして答えた。そんな私に毎朝太陽よりも早く目覚める隣人は笑って言った。

「どうだい、たまには早起きもいいものだろう？ こうして毎朝おてんと様に顔を合わせれば、一日の仕事もはかどるってものさ。さあ、仕事を始めよう。今日もよろしくな」

「はい！」

努めて元気に返事をし、朝露に濡れた野良道具を手にした。それから彼の横に並び作業を手伝い始めた。こうして私の里での一日は始まる。

光和四年七月二十三日の宵（西暦一八一年八月十九日の夕暮れ時 ※1）。夏の盛りの太陽が陰を宿す季節、太白<sup>たいはく</sup>（金星）が西空で輝く時刻に私は生まれた。

約四百年続いた大国、漢<sup>かん</sup>が傾き始めた時期とも重なる。

幼い頃の記憶に残る漢は、高度な文化を持つ煌びやかな国だった。建物も調度品も人々の衣服も、金をまぶした華やかな色で染め抜かれ眩<sup>まぼゆ</sup>いほどであった。その天上のごとき豪奢<sup>ごうしゃ</sup>で進歩的な文化は、後世の人たちが思い浮かべる“未開の古代”という想像を覆すだろう。

高祖（漢の初代皇帝。劉邦のこと）が敷いた明るく自由な気風によって、漢代の学問芸術は発展し人々の知性も押し上げられた。官学となった儒教<sup>じゆきやう</sup>は中心的な学問として学ばれていたが、当時の知識層は儒教以外の古今東西の書物も読み活発に言論を行った。

派手好みの人々が多かったのも、贅沢を責める声が少なかった寛容な時代性ゆえだろう。私が生まれた頃は王朝の財政が傾き質素が叫ばれた時代だったが、派手好きな漢人の性質はすぐには改まらず豪族（貴族）たちの身の周りは眩しい金赤に溢れていた。私の生家は文官の家らしく質素なほうであったが、それでも相応の高価な家具に囲まれていたことを覚えている。

しかしいっぽうで硬化した世襲制と、大金持ちだけが地位を得る売官の横行に、浮かばれない人々の不満は募っていった。桓帝と靈帝はそんな国の綻びを顧みることなく<sup>かんがん</sup>宦官の声だけを聴き、清流派の大粛清を許し、十常侍<sup>じゅうじやうじ</sup>たちの専横を招いたのだった。

傾国が顕<sup>こうきん</sup>わとなる黄巾の乱が起きたのは、たしか私が四歳の頃だ。

黄色い布を身に着けた道教集団が掲げた標語、

「蒼天すでに死す 黄天まさに立つべし」

とは五行思想に基づく易姓革命えきせいかくめいを表していた。※2

革命とは「天から受ける命を革めるあらた」の意味。つまり王朝の交代を意味する。漢王朝は火徳の赤を象徴するので、彼らは五行の順で次に当たる土徳の黄を自ら掲げ、「次に中華の支配者となるのは我々黄巾団だ」と宣言したのであった。

なお前段の“蒼天”とは漢王朝の一つ前に天命を受けた木徳（青）の周しゅうを指す。その周から漢へ天命が移された時と同じように、「今こそ漢から我々へ天命が譲られるべき時だ」と暗示した。それが「黄天まさに立つべし」の意味だ。さらに「蒼天すでに死す」との強調で、土徳の黄を剋す蒼天（木徳）はすでに存在しない、このため我々の天命は止められないとも説いた。つまり暴力を正当化する意味を含んでいた。

このような意味は陰陽思想が庶民にも浸透していた当時、子供でさえ理解できた。分かりやすい標語だったために広く伝聞されたのだ。

宦官の専横で傾いていく朝廷の足下、貧困にあえいでいた流民たちが黄巾賊に加わり暴徒化していったのは自然の成り行きだった。

瞬く間に黄巾団は各地の盗賊も吸収して膨れ上がり、“革命”とは名ばかりの強盗と殺戮で中華全土を貪り喰った。こうして黄巾団は名実ともに黄巾“賊”となった。

漢室は各地の豪族へ黄巾賊征伐を号令。豪族たちの活躍で乱は収束したものの、今度はその豪族の力が強まったことでさらに漢は混乱することとなった。

靈帝が崩御ほうぎょしたのは、私が九歳の頃（西暦一八九年。年齢は数え）。

その後起きた何進と袁紹らによる宦官肅清、彼らが都へ招いた董卓の暴政、続く乱からの救済を求めた曹操による廷臣の大肅清および献帝の傀儡化、朝廷の実権を奪った曹操の好き放題な虐殺行脚あんぎゃ……。

幼かった私の頭上を数えきれない惨劇が通り過ぎ、煌びやかだった国は目の前で死屍累々の地獄と化していった。その地獄化を最も推し進めた蛮行であった曹操の民衆虐殺は、一時私の身近にも迫った。

漢の朝廷は問題を解決しようとするたび自滅の道を選んでいるように見えた。悪を浄化するために獣を都に呼び込み、その獣を退治するためにさらなる凶悪な虐殺魔を地獄から召喚しょうかんしたので。

この地獄化が止まらない国の片隅で、私はかろうじて平和が保たれていた荊州けいしゅうに逃れて生き延び、二十歳を迎えた。

「そう言えば、亮ぼっちゃんの冠礼（成人式）はいつだい」

里の人々は親しみと敬意を込めて私を“ぼっちゃん”と呼んでいた。素性を明かさずに暮らしていたのだが、畑仕事以外の時間を書物ばかり読んで過ごしていたため書生扱いで敬意を払ってくれたのではと思う。

「いえ、僕は実の父も養父も亡くしていますし、親族とも離れて暮らしていますから礼式はできません。しなくてもいいのです……」

うつむき加減で答えると老若男女で私を取り囲み、  
「駄目だよ！ 良家のぼっちゃんが冠礼を略すなんて」

「我々が父代わりとなって、式を執り行おう。立派な衣服は用意できないがご馳走をたんと作るよ」

口々に言いながら迫って来る。その迫力に私は気圧されて小さくなりながら苦笑した。良家の人間だなどという話をしたことはないのだが、何故。軟弱な見た目ではばれてしまっていたのか。

とにかく世話好きな里の人々の厚意を退けることは不可能と分かっている。断っても祝いの席を用意してくれるだろうし、逃げても探し出されて主役の席に就かされるだろう。

「ありがとうございます。ではご厚意に甘えて、お祝いをさせていただこうかな。でも本当に、ちゃんとした式でなくて結構ですからね。形式通りにされたら僕も窮屈です」

こう言って受け入れると歓声上がり、皆が笑顔になった。

この押しつけがましいお節介が温かい。寂しい幼少期を過ごした私には新鮮でありがたかった。熱い人の心に氷の棺が解かされ救い出される想いがする。

荊州の襄陽城じょうようより二十から三十里（漢代の単位にて。十～十五キロメートル）ほど離れた所に隆中りゅうちゅうという山里があった。養父である伯父を亡くした後、私と均はその山里で小さな家を借り、畑仕事をして暮らしていた。

何故襄陽から離れた地に住んでいたのかと言うと、親族と距離を置き静かな暮らしをしたかったからだ。

襄陽には伯父の妻であった伯母たちと義理の姉妹たち——つまり伯父の娘、従姉妹たち——が住んでおり、さらにその夫の一族がいた。

私はこの乱世で仕官するつもりはなく、一生を書物に沈潜ちんせんして過ごすつもりでいた。徐州の惨劇と伯父の末路を目の当たりにし、権力者に翻弄されて身を散らすのは無意味なことだと思えたからだ。せつかく救われた命を有用に使う、もっと意義深い道があるはずだ。たとえば永きにわたり、人を善き方向へ導き続ける思想を残す道などが。それは仕官して短い期間だけ役目を勤める人生より有意義と思えた。おそらく無名のまま終わるだろうが、死ぬ直前に思想の一つでも書物にまとめて残せたら幸福だ。そう考えていた。

しかし襄陽の親族は決して私の志を認めなかった。

諸葛は前漢の司隸校尉しりょうこういを勤めた豊を始まりとして、代々役人を輩出してきた名家。そんな諸葛の名に恥じぬよう、早いうちに仕官し出世して高位から世を動かせと言われた。「僕は仕官しない。隠棲し、思想家を目指す」

と正直に志を告げると始め「変わり者の戯言」と笑われ、本気だと悟られてからは怒りを買った。

親族は連日私のもとへ押しかけ、早く仕官しろ仕官しろとしつこく説教を続けた。

若いながらも私は気付いていた、諸葛でもない姻族たちがあれほど“諸葛”の名にこだわるのは自分が地位の恩恵を受けたいからであると。親族のうち誰か一人でも高位を得たなら、姻族を含めた全員が恩恵に授かるのが華夏の伝統かかだった。

そのような欲得に基づく説教を浴びるのに疲れ果て、ある日、書物だけ背負って襄陽城を抜け出し里へ向かった。

埃臭い道の途中、ふと後ろを振り向くと均がついて来ていた。

「何故、ついて来る？　これから貧しい暮らしになるというのに」

啞然として問うと、二歳下の弟は屈託のない笑顔を見せた。

「兄さんとは子供の頃からずっと同じ道を歩き続けたろ。これからも一緒だ」

そうだった。屍の傍らを歩いたあの暗い道。荷馬車に隠れ命からがら襄陽へ逃れた道。いつも弟だけが一緒だった。

「我が同志よ」

ふざけて言ったのだが均は本気で嬉しそうに笑い、私の少し後ろを歩いた。その足取りは軽い。かつての旅の道中、母が恋しいと泣いてばかりいた幼い弟の面影はもうなかった。

「それで、<sup>あざな</sup>字は、どうするの？　里の長老に名付けてもらうのか」

里の人々に冠礼代わりの宴席をもうけてもらうと話した時、均が心配げに言った。

<sup>あざな</sup>字とは成人したとき本名とは別に付ける名で、成人後にはこの別名で呼び合うことになる。通常、父親や親族が字を考え成人した息子へ贈るのだが、我々に父はなく親族との関わりも薄いため当てがなかった。

「いや。自分で考えている」

「えっ。何、何。どんな字」

均は目を丸くして驚き、次の瞬間には興味津々で聞いてきた。めずらしいことだが後見人がない青年が自分で字を考えることもあった。ただ自分で考えた場合、少し主張が強くなり過ぎるきらいがある。だから私はなるべく簡素な字にしたいと考えていた。文字そのものも画数が少なく柔らかな印象を与えるものを選んだ。そのほうが軟弱な自分に似合っているように思えたからだ。体が細いのに、強い武将のような字を名乗るのは恥ずかしい。

「<sup>こうめい</sup>孔明——という字で考えているが。どうだろう？」

宙に指で文字を書いて見せる。

「ふうん。覚えやすく、いいんじゃないか。<sup>あきらか</sup>亮という本名と意味を合わせたの？」

正直それは考えていなかったので意味の一致に驚いた。

「いいや。本名を意識したものではない。孔明とは<sup>けいめい</sup>啓明のことだよ。そのままでは芸がないので、孔明とした」

「啓明……へえ、明けの明星か。宵の明星、太白と対になるわけだ。面白い」

「うん」

頷き、ちょうど西の山頂に輝き始めた明星を窓越しに見上げた。

私は宵の明星とともに生まれた。だからきつと夜を飛び、明けの明星を目指すことになる。夕暮れ時に飛び立ち暁を目指す梟のように。

「なあ、均。明星は、天蓋に針で開けた一点の<sup>あな</sup>孔に見えないか？」

西空を指さし、呟いた。

「この世はきっと丸い天蓋を被せた箱庭だ。我々人間は、偽物の世界である箱庭に閉じ込められている。しかし天蓋の向こうには真実の世界が広がっているんだ。その真実を時折、天蓋に開いた針の孔を通して我々は垣間見ている……」

独白のような私の眩きを均はぼかんと口を開けて聞いていたが、やがて笑い出した。

「また兄さんの空想癖が始まった。それは自分で創作した神話だろう？ 他所で聞いたことがないよ」

「そうだったろうか。どこかで聴いたような気もするが。ええと、どこだったかな」

思い出そうと首を傾げる私の肩を叩きながら、今度は均が訳知り顔で占いを始めた。

「しかし“孔明”とは、大変に明るいとも解釈できる。つまり最大級の光のことだね。兄さんはきっと啓明どころではなく、太陽のように眩しく輝いて真実とやらを伝えることになるんじゃない？ まあせいぜい、がんばって」

「なんだその雑な占いは。そんなわけない。この地味な兄のどこにそんな素質がある。お前こそがんばれよ」

怒る私に均はへらへらと揶揄う笑いを返した。また馬鹿にしている。時折、突飛な発言をするらしい私を幼い頃から家族は面白がっていた。故郷に残った兄もよく「お前は他の子と視点が違う」と面白がった。そんなに変なことを言っているのだろうか。

でも真実の話は本気だ。

多くは望まない。針のように小さな孔で良いから、暗い天蓋へ開けて真実の光を人々に見せたいと願う。あるいは、分厚く垂れ込めた雲から差し込む一筋の陽光でこの世を照らしたい。たとえこの世が地獄であって隈なく悲劇の雨が降り続けるのだとしても、向こう側には必ず真実があるのだと伝えたかった。



注釈



※1 「西暦」とはこの小説執筆時（日本国、令和五年）における現行グレゴリオ暦のこと。諸葛亮の誕生日、七月二十三日は伝承に基づく。出生時刻は著者推測。推測の詳細はこちらに掲載（ただし占星術の手法による）：<https://astrology.kslabo.work/2021/04/Zhgeliang.html>

※2 五行革命で掲げられる色のシンボルは相克思想に基づく場合と、相生思想に基づく場合とがあり、黄巾乱は後者だった。なお周王朝（青）の次が漢王朝（赤）とされたのは、中華史において秦は正統な王朝とみなされず相生の順から省かれたため。黄巾乱のスローガンについては、日本では“蒼天”を漢王朝のことだと誤った解説をしたり、「単に晴れた青空のこと」などとの曲解をする人が多い。これは現代日本において道教が浸透しておらず五行の基本知識を持つ人が少ないためであると考えられる。さらに近年ではイデオロギーによって、道教思想を過去から抹消する目的で「黄巾乱は五行革命とは全く関係なかった」との嘘を語る学者も増えた。組織的な歴史修正に注意を要する。詳細：<https://shoku1800.tokyo/2020/10/be-water/>

---

我傍に立つ【実名版～諸葛孔明 自伝風】 1

---

著 吉野圭

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---